

ロータリーの友

ロータリーの友11月号 第61巻 第11号
平成25年11月1日発行(毎月1回1日発行)
通巻731号 昭和28年1月創刊
昭和43年4月23日第3種郵便物認可
発行所 一般社団法人ロータリーの友事務所



THE ROTARY-NO-TOMO
NOVEMBER 2013 VOL.61 NO.11

11

2013

ロータリーの友 11

ロータリー財団月間



SPEECH

放射能ゼロ米への挑戦

吉成 邦市

わがまち……そしてロータリー

愛知県名古屋市

ロータリーの友

ロータリーの友11月号 第61巻 第11号
平成25年11月1日発行(毎月1回1日発行)
通巻731号 昭和28年1月創刊
昭和43年4月23日第3種郵便物認可
発行所 一般社団法人ロータリーの友事務所



THE ROTARY-NO-TOMO
NOVEMBER 2013 VOL.61 NO.11

11

2013



2013年 第61巻 第11号

210円(本体価格200円)

ロータリー財団月間
新しくなったロータリー財団

世界インターアクト週間
若いパワーでがんばってます インターアクター

んぼでとれた米を検査したところND(未検出)でした。

天栄村が汚染されていないとは言いません。ですから、「安全ですよ」と言うだけでなく、きちんとデータを開示しなければ、やっていけませんでした。空間線量、土壌汚染の度合いなど、データは細かく調べました。すべてはデータに裏付けされなければいけません。データがないものについては誰も信じてくれません。ですからわれわれは、測ったデータをすべて開示しております。

このようなことで初めて、理解していただけたらと思うのですが、それでも、そんなに簡単に理解していただくことはできません。地道な努力を続けるしかないだろう、と思います。

これが、最初の一年の取り組みです。その一年目に放射性物質と闘いながら、やっぱり今年も「日本一取らねど、本物でねえべ」と農家の方々が話をするのです。農家の人は強いんです。本当に、自分のお米にプライドを持って作っています。われわれは、そのことをきちんと消費者に伝えなければいけないと思って、活動をしていきます。

結果、震災のあった二〇一一年のコンクール、第一三回大会では金賞。この時はすごい点数が良かったです。皆さん、本当に頑張ったなあと思っております。

二年目、研究会の取り組みの成果を活用し、全村でゼロライトをまきました。カリウムもまきました。プルシアンブルーの布を六〇〇か所

設置しました。プルシアンブルーは水に溶けたセシウムを吸着する力が抜群です。ここでセシウムがキャッチできます。天栄村でとれた米からはセシウムは絶対に出さない、という気持ちを持って今取り組んでいます。

負けない あきらめない

昨年、天栄村は一四万七〇〇〇袋を測定しましたが、二五ベクレル以上のものは一九袋しか出ていません。しかし、われわれが今思っているのは、残念ながら、全袋ゼロにならなかったことです。今年は全袋ゼロにします。

今年も昨年同様に、三年目の取り組みを行っています。しかしいつまでも、農家の方々に余分な作業をさせておくわけにはいかないのです。最終的には農家が普段通りに作ってセシウムが検出されない、という土地を取り戻すために、われわれは活動しておりますので、今年もゼロライトをまかない実験水田も、作っております。

四月現在、放射線量は天栄村の役場の所で約〇・二七くらいでしょうか。私の机の上ですと〇・〇七。建物の中は原発事故の被害を受けていない地域と変わらないところまで、放射線量が下がってきています。

事故当初、放射線量が高いにも関わらず、五月の田植えに東京から、一〇人近くの方が手伝いに来てくれました。作付けをすると話したら、いてもたってもいられなくて、手伝いに

来た、ということでした。高速道路もようやく復旧したばかり、という時期に来ていただき、農家の方々のうれしそうな顔が今でも思い出されます。今われわれは除染をしながら、そういった天栄村が大好きな人たちに、もう一回、安心して気持ちよく訪れていただけるような地域を取り戻す活動をしています。

われわれは最終的に何を目標にするのか。放射性物質の対策から早く立ち直ることはもちろんですが、最終的にはやはり「日本一のおいしい米を生産」すること。これが農家のわれわれの使命だと思っております。

コンクールでは、昨年で五年連続の金賞でした。東北、新潟を合わせた中で唯一、金賞をいただいたのは天栄村だけです。非常に苦しい中、農家の方々のあきらめないその姿を皆さんに理解いただき、表彰式時には大きな拍手をいただきました。福島の時に「あきらめない」「やっぱり負けないんだ」「あきらめない」。そういうあきらめない姿を、全国の農家の方々、消費者の方々へこれからも見せて差し上げられれば、と思います。

カタカナ名のフクシマ。先日、講演で水俣にも行ってきましたが、水俣もカタカナ名です。そういう中でもう一度、漢字の福島に戻りたいということでもあります。皆さまで力を合わせて天栄村だけではなく、福島県の復興のためにがんばっていきたいと思っておりますので、よろしくお願ひしたいと思います。

(ホスト 白河西RC)

愛知県名古屋市の

旧町名の復活を夢見て 歴史を学ぶ

文・宮本 貢 写真・水村 孝

古い町名は 歴史そのもの

名古屋の中心街にある料亭「つたも(蔦茂)」は今年創業一〇〇年を迎えた。ホームページを開くと、中庭の池で泳ぐ色鮮やかな鯉の写真が目飛び込む、そんな老舗の料亭である。

三代目・深田正雄さんによると、このあたりはいまは「栄三丁目」だが、かつては「住吉町」と呼ばれた花街だった。料理屋や料亭が軒を連ね、芸者さんも行き交った。

深田さんは一人息子で祖父っ子。かわいがられた。朝、「お坊ちゃん、馬に乗ってください」と馬丁さん(一)に言われ、近くの公園を一周してから幼稚園や小学校に行った。「ほんとうに変わった子」だったそうだ。この地に寄せる思いは深い。

近くに進駐軍の「アメリカ村」があった。正雄君(彼は子ども時代自分を「正雄君」と呼んだり書いたりする)は学校の行き帰りにゲートの米兵に「ハロー」と声をかけ、チョコレートやチューイングガムをせしめまくった。

昔、東京・赤坂にキャバレー・ミカドをつくった山田泰吉さんや、「どえりやあ土地持ち」(正雄君の祖父談)で日本ヘラルド映画などヘラルドグループを率いたフルタメこと古川為三郎さん(いずれも故人)もこの地が本拠。タバコ屋をやっていた大正生まれのよねちゃん(平尾米子さん)は住吉の看板娘(?)。店先に座っ



旧住吉町を案内する深田正雄さん



大正時代版古地図





(右)「名古屋の旧町名を復活させる有志の会」の例会。(右下)創業100年を迎えた料亭「つたも」。(左ページ左)例会の講師「なごや歴まちびと会」事務局長・野田和樹氏。(左ページ右)北見昌朗氏(左)と深田氏

田さんが反応し、会が生まれた。代表は北見さん、世話人が深田さん。月に一回、講師を招いて、名古屋の町や建物の歴史をゆる〜く学んでいる。

ロマンがあるが実益がない

取材に行った日の夜、第一八回例会に参加させてもらった。会場は「つたも」。なんだか楽しそうに集まった二十数人の中には、小牧RCの河村嘉男さん、名古屋大須RCの浅野彰さんの顔も。

この日の講師は「なごや歴まちびと会」事務局長で一級建築士の野口和樹さん。由緒ある建物を保存するための相談を受け、アドバイスなどをする公的な団体だ。

支援を受けて保存された建物、残念ながら取り壊された建物。スライドを映しながら野口さんが説明すると、みなさん見覚えがあるようで、「ほお〜」「へえ〜」。うなずいたりため息を洩らしたり。中学校の同窓会のような、どこか懐かしい盛り上がりを見せたのだ。

旧町名復活の動きは全国いくつかの地区で起き、石川県金沢市や大分県豊後高田市などで一部実現した。もちろん簡単ではない。地区の住民、企業、地主の賛成が必要だからだ。

「昔の町名を復活しようと言っても説得力が弱いんです。手間も費用もかかりますからね。ロマンはあるが実益がない。金沢みたいな観光都市は別でしょうが」(北見さん)

会の趣旨には河村たかし市長も賛同してい

いうのがある。わかりやすい名前だ。去年誕生した。発足のきっかけは一昨年、深田さんが所属する名古屋中ロータリークラブ(RC)で、歴史好きの社会保険労務士・北見昌朗さんが行った卓話である。

北見さんは元新聞記者。郷土の商人史を調べていて昔の文献にあたり、当然だがすべて旧町名で書かれている。さっぱりわからない。

一九六二年施行の住居表示法が原因だ。各地の町名や番地などが整理、統合されていった。バラバラの表示をまとめることで、郵便配達はじめモロモロの不便を解消するためだそう。

その過程で、昔からある多くの町名が消えた。名古屋の中心の中区でも、たくさんあった町名が「丸の内」「栄」「錦」などにまとめられた。「京町」「両替町」「蒲焼町」「鉄砲町」など、由緒ある町名は消えた。「つたも」がある「住吉町」もその一つだ。

「古い地名は歴史そのものです。それがわたしの年代でもうわからなくなっている。歴史の断絶です」と北見さん。たしかに芝居も古典落語も地名がわからなくては実感が湧かない。

これではいかんと郷土の古地図を調べ上げ、江戸から明治、大正時代の地図を四種類作って私費で出版した。一見地味で物静かな印象の北見さん。こと名古屋の歴史となると熱い。

そんな北見さんの話と活動に深



例会参加者で記念撮影



北見昌朗さんと河村嘉男さん



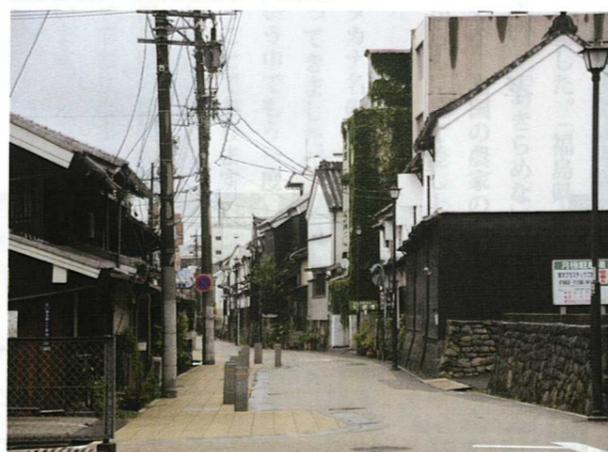
「住吉の語り部」をご覧ください。
「住吉」を案内してもらった。
深田さんはけっこうせっかちだ。ここにはこんな店があつてと説明しながら、どんどん先へ行ってしまふ。途中、すれ違う人に挨拶し、挨拶される。場外車券売り場のガードマンに声をかけ、チラシを配っていたメイド喫茶のオネーサンにまで、「きれいなえ」



て、花街を訪れる客の案内、相談にものつていた。嫌われると大変なので、山田さんもフルタメさんも頭が上がらなかつたとか。

興味のある方は、深田さんのホームページ (<http://musho.jp/fukakax.htm>) に連載されている

蔵などの古い町並みが残る「四間道」



旧住吉町の歩道には、店を示す陶板がはめこまれている。左は「よねちゃん」のタバコ屋。

友愛の広場



FRIENDSHIP PLAZA

エッセー、海外のロータリークラブ訪問記、時局雑感など。1,000字以内。関連写真があれば添付してください。

ロータリーの考え方

東城 一森 義史

今年二月、東城応援隊インターアクトクラブが創立されました。私たちの地区では一三年ぶりのインターアクトクラブの創立となります。同クラブがインターアクトの精神にのっとり国際交流を推進できるよう、スポンサークラブである私たちは、この街の出身で、ロサンゼルスの高校に勤める教師の協力を得て、両校の姉妹校提携を支援することにしました。その調印、交流行事のため、学校から生徒代表、校長、英語教師らの一行に私が同行しました。ロータリー発祥の国であるアメリカで、現地のインターアクトクラブとの交流も模索しましたが、準備のための時間が足りず、次回への課題となりました。



ロータリーの考え方を教えてくれたテリーさん（左）とともに

は台北北門ロータリークラブ（RC）を訪問し、心温まる交流ができました。例会で話される言葉は全くわかりませんが、日本語が堪能なテリーさんという会員が丁寧に説明してくれました。SAA（会場監督）の人たちが肩を組んで、現地のロータリーソングをリードする姿や温かい雰囲気は感動されました。

ちょうど合同例会だったので、テリーさんに「私の通訳のために、他の人と交流できなくてすみません」と言いましたら、「それはロータリーの考え方ではないでしょうか？ あなたのために奉仕することは私の喜びであり、迷惑だなんて考えないでください」という温かい言葉をいただきました。

台湾北門RCは、日本の三つのクラブ（びわ湖八幡RC、茅ヶ崎RC、越谷西RC）と

思えば、七、八年前になるだろうか、飛行機のタラップを降り、カンボジアの大地に足を着けたのは、春にもかかわらず暑かったが、私はある目的を持って、かの地へ渡航した。その目的とは、無医村を回って医療の巡回ボランティアをすることだった。

私の住む大和市は、人口約二三十万人。特徴のある産業も特産物もない市であるが、インドシナ難民の定住センターがあった。今から三〇年以上も前だが、当時、在日カンボジア人の二世と呼ばれる子どもたちと机を共にした。その時、祖国の状況を聞き、子ども心に戦争に対するつらさなどを感じたが、いつし

未来の夢に向かって

大和中 引田 俊一

姉妹クラブ締結しているとのことでしたが、私のような飛び込みの新米ロータリアンに対しても姉妹クラブの旧知の友のように接してくれ、空港に向かう途中で送ってくださいました。

私が「わざわざ送っていただきましてすみません」と言いますと、再びにこやかに「それはロータリーの考え方ではないでしょうか？」と言われました。その先輩ロータリアンの温かさが、今でも心に残っています。

（第二一〇地区 広島県 宗教）

わがまち..... ROTARY そしてロータリー



につぼんど真ん中祭り

ない。いやな町という印象でした」と言う。だから生まれ育った街を飛び出し、アメリカ、東京のホテル業界で修業、名古屋に戻ったのは三五歳のときだった。

街を元気にするのは
若者、よそ者、変わり者

以後の三〇年は、好調な経済にも引っ張られて街が自信を取り戻していく時期に重なる。深田さん自身、その担い手のひとりだった。

子どもころから自他共に認める「目立ちたがり屋」。何かあると必ず手を挙げる。名古屋に戻って手始めに立ち上げたのが、若手企業人を集めた「名古屋経営研究会」。政治家になる前の河村現市長もメンバーだった。

その後もさまざまな組織や団体、人の輪の中心に居続け、地域活動を引っ張ってきた。街が変わってきたのはここ一〇年ほどだ。ヨソモノが進出し、地元もそれを歓迎する。閉鎖性は昔の話になった。

「街を元気にするのは」と深田さんは言う。「若者、よそ者、変わり者なんです」。そういうことなら、よそ者ではなく、もちろん若者でもない深田さんの役回りは……変わり者？

近年、旧住吉地区を中心にした一角は「栄ミナミ」と呼ばれている。盆踊りや期間限定の屋外スケートリンク「ナゴリン」、地産地消の名古屋グルメを競う「NAGOIグランプリ」や「栄ミナミ音楽祭」など、栄ミナミ発の元気なイベントが次々に生まれた。「旧町名の会」もその流れの中にある。

もともと名古屋は「芸どころ」と言われた。「それはね、京大阪と江戸を往来する芸人さんが小遣い稼ぎにちよいと寄ってくれたから」。

「エビフリヤア」のころ、自信喪失の名古屋人が言うのを聞いたことがある。これは正しくない。

今回お会いした人たちから、「ムネハル」の名前をたびたび聞いた。尾張藩の七代目藩主徳川宗春公。祭りや芸能を奨励し、さまざまな規制緩和、武士と町人の間の垣根を低くするなど、の施策で華やきに満ちた文化都市をつくつたとされる。「芸どころ」の始まりだ。

いまの名古屋の自信は、経済だけではなく、宗春公時代からの文化に支えられた暮らしの活気による、と思うのだがどうでしょう。

取材で訪れたとき、名古屋は「どまつり」の最中だった。正しくは「につぼんど真ん中祭り」。国内外からの二〇〇チームが市内各会場で踊り狂う、下熱いお祭りだ。

翌日の朝は雨だった。警備詰めの警察官に尋ねると、「やります。このぐらいの雨はなんでもありません。雷でも鳴ったら別ですが」。

名古屋は警察官も気合十分なのであった。

宮本貢（みやもと・みつぐ）
元朝日新聞記者。退社後、フリーで活動。
水村孝（みづむら・たかし）
元朝日新聞出版写真部編集委員。現在フリー。

